【科学研究費補助金基盤 (A) プロジェクト】
バウッダコーシャの総括的研究：
仏教用語の日英基準訳語集の次世代モデル構築に向けて

Bauddhakośa Newsletter no. 8

2019 年 12 月

目次

本プロジェクトの経緯と概要
経緯 1
概要 2
本プロジェクトに携わる研究者 2
活動報告
第 4 回国際中観研究ワークショップ報告 3
第 64 回 ICES シンポジウム I 報告 4
『『中観五蘊論』における法体系 ―五位七十五法対応語を除く主要術語の分析』出版を終えて 5
記事 8
研究ノート
般若波羅蜜とマントラの語義 ―ヴィマラミトラの『般若心経注』より―（堀内 俊郎） 9

本プロジェクトの経緯と概要

経緯

本プロジェクトは「バウッダコーシャの総括的研究 ―仏教用語の日英基準訳語集の次世代モデル構築に向けて―」（基盤研究 (A)・研究代表者斎藤明）と題する科学研究費助成事業である。研究期間は 2019 から 2021 年度の 3 年度が予定されている。これに先行して、2016–2018 年度の 3 年間に、研究代表者は、研究分担者および研究協力者とともに「バウッダコーシャの新展開 ―仏教用語の日英基準訳語集の構築―」（基盤研究 (A)）と題するプロジェクトを遂行してきた。この間の活動と研究成果については、Newsletter no. 6（2017 年 7 月）および同 no. 7（2018 年 9 月）を刊行し、国際ワークショップ、公開シンポジウムの報告、複数の研究ノートによる成果報告等を行うとともに、各研究班の具体的な研究成果を紙媒体および電子媒体で公開した。

とくに、この 2 年半の研究期間に、

- 宮崎泉・横山剛他編著『『中観五蘊論』における五位七十五法対応語』（バウッダコーシャ IV）山喜房佛書林、228 pp.、2017 年。
- 室寺義仁・高務祐輝・岡田英作『『瑜伽師地論』における五位百法ならびに十二支縁起項目語』（バウッダコーシャ V）山喜房佛書林、201 pp.、2017 年。
- バウッダコーシャ研究会（河﨑豊・一色大悟・岡田英作・高橋晃一・Akira Saito・横山剛・石田尚敬）「prajñā/ paññā (般若) の訳語をめぐって」『仏教文化研究論集』18/19（特集号）、92 pp.、2017 年。
- Akira Saito et al. *The Seventy-Five Elements (dharma) of Sarvāstivāda in the Abhidharmakośa-bhāṣya and Related Works.* Bauddhakośa: A Treasury of Buddhist Terms and Illustrative Sentences, Volume VI. Studia Philologica Buddhica XXXVII, Tokyo: The

International Institute for Buddhist Studies, 179 pp., 2018.

の 4 点を本プロジェクトの研究成果として公にした。

このような現在進行形の研究を遂行する中で、本プロジェクトを総括するとともに、次世代の研究者への発展的な継承をなすことが責務であると自覚し、本研究を着想するに至った。

概要

本研究は、上述の関連研究（基盤 (A)、2016–2018 年度）とその成果をふまえ、これまでに確立した方法（XML 形式による関連文献・用例の整理）を採用し、およそ 300 の重要な仏教術語について、定義的あるいは主要な用例を根拠としながら、国際的な研究協力の下で、現代語（日本語・英語）への基準的な訳語集を構築し、その成果を内外に発信することを目的とする。

本研究はとくに、2018 年 10 月に関連研究の成果として公刊した説一切有部による心身の諸要素の体系「五位七十五法」の英語版に引きつづき、インド瑜伽行派の「五位百法」の英語版を完成させるとともに、この間に培った方法を経・律の両典、ならびに仏教論理学と密教分野の主要術語に適用し、それらの具体的な成果を得て、バウッダコーシャ研究を総括する。とともに、本研究の方法とこれまでの研究成果をふまえ、今後の課題と展望を率直に議論・整理したうえで、次世代の学界を担う研究者による発展的な継承に向けた礎を構築したい。

本プロジェクトに携わる研究者

研究代表者

斎藤 明
（国際仏教学大学院大学・教授）
「総括＋インド大乗仏教論書関連」

研究分担者

榎本 文雄
（大阪大学・名誉教授）
「パーリ仏教関連用語」

下田 正弘
（東京大学大学院人文社会系研究科・教授）
「大乗仏教関連用語＋人文情報学関連情報の提供」

室寺 義仁
（滋賀医科大学医学部・教授）
「インド瑜伽行唯識思想関連用語」

佐久間 秀範
（筑波大学大学院人文社会系・教授）
「インド唯識思想関連用語」

宮崎 泉
（京都大学文学研究科・教授）
「中観思想関連用語」

山部 能宜
（早稲田大学文学学術院・教授）
「インド・中国禅思想関連用語」

種村 隆元
（大正大学仏教学部・准教授）
「インド・中国密教関連術語」

高橋 晃一
（東京大学大学院人文社会系研究科・准教授）
「瑜伽行唯識思想関連用語」

石田 尚敬
（愛知学院大学文学部・准教授）
「仏教論理学・認識論関連用語」

研究協力者

Paul Harrison（Stanford 大学・教授）
Jonathan Silk（Leiden 大学・教授）
Dorji Wangchuk（Hamburg 大学・教授）
葉 少勇（北京大学・副教授）
何 歓歓（浙江大学・教授）
王 俊淇（中国人民大学・講師）
鄭 祥教（金剛大学校仏教人文学科・准教授）
ツルティム・ケサン（大谷大学・名誉教授）
Charles Muller（武蔵野大学経営学部・教授）
蓑輪 顕量（東京大学人文社会系研究科・教授）
石井 公成（駒澤大学仏教学部・教授）
渡辺 章悟（東洋大学文学部・教授）
桜井 宗信（東北大学文学研究科・教授）
馬場 紀寿（東京大学東洋文化研究所・教授）
新作 慶明（武蔵野大学経済学部・講師）
永崎 研宣（人文情報学研究所・所長）
苫米地 等流（人文情報学研究所・専任研究員）
菊谷 竜太（京都大学白眉センター・特定准教授）
堀内 俊郎（斉藤研究班）
一色 大悟（斉藤研究班）
崔 境眞（斉藤研究班）
清水 尚史（斉藤研究班）
楊 潔（斉藤研究班）
王 楠（斉藤研究班）
劉 暢（斉藤研究班）
生野 昌範（斉藤研究班）

河﨑 豊（榎本研究班）
名和 隆乾（榎本研究班）
古川 洋平（榎本研究班）
岡田 英作（室寺研究班）
高務 祐輝（室寺研究班）
中山 慧輝（室寺研究班）
横山 剛（宮崎研究班）
三代 舞（山部研究班）
真鍋 智裕（山部研究班）
佐々木 亮（山部研究班）
佐藤 晃（山部研究班）
林 慶仁（山部研究班）
野武 美弥子（山部研究班）
藤本 庸裕（山部研究班）
道元 大成（山部研究班）
倉西 憲一（種村研究班）
大塚 恵俊（種村研究班）
伊集院 栞（斉藤/種村研究班）

活動報告

国際ワークショップ
4th International Workshop on Madhyamaka Studies (IWMS2018)
“Linguistic Challenges: Mādhyamikas and their Key Words”

2018 年 12 月 1 日（土）と 2 日（日）の 2 日間、バウッダコーシャ・プロジェクト（代表：斎藤 明）の主催により、第 4 回国際中観研究ワークショップが、国際仏教学大学院大学（2F 大講義室）において開催された。同ワークショップは、2015 年 8 月に第 1 回（“Candrakīrti vs. Bhāviveka” 於東京大学）、2016 年 5 月に第 2 回（“Bhāviveka and *Satyadvaya*” 於龍谷大学）、2017 年 7 月に第 3 回（“Bhāviveka and Buddhist Logic” 於浙江大学）と、毎年独自のテーマを設定して開催されてきた。今回の第 4 回ワークショップは、科研費プロジェクトの一環として、“Linguistic Challenges: Mādhyamikas and their Key Words”（言語的挑戦 ―中観学派のキーワード―）と題して、国内外から総計 13 名の研究者により発表がなされ、充実したワークショップとなった。発表者と題目は以下のとおり。

12 月 1 日（土）

Zhao, Wen, “*Dharmatā* and Its Synomyms in Early *Prajñāpāramitā* Literature and Madhyamaka Treatises”.

Saito, Akira, “*Prapañca* in the *Mūlamadhyamaka-kārikā*”.

MacDonald, Anne, “Preliminary Explorations into Madhyamaka Views on Language and Naming”.

Stepien, Rafal, “*Dṛṣṭi* (觀) as *Grāha* (取, 執) in Indian and Chinese Madhyamaka”.

Nishiyama, Ryo, “Bhāviveka on *tathyasaṃvṛti*”

Katsura, Shoryu, “Tibetan Translations of *svabhāva*, *parabhāva*, *bhāva* and *abhāva* in the 15th Chapter of the *Prajñāpradīpa*”.

Eckel, Malcolm David, “Bhāviveka’s Interpretation of the Term “No Cause” (*ahetu*) in MMK 1.1 and the Argument against the Concept of ‘Lord’ (*īśvara*)”.

12 月 2 日（日）

Ham, Hyoung Seok, “Bhāviveka on the Veda”.

He, Huanhuan, “Mind and ‘Mind’ in Bhāviveka’s *Madhayamakahṛdayakārikā*”.

Bayer, Achim, “The Predicate *cittamātra* at *Madhyamakāvatāra* 6.87, and What It Predicates”.

Wang, Junqi, “Catuṣkoṭika in Candrakīrti’s *Prasannapadā*, Chapter 25”.

Niisaku, Yoshiaki, “Candrakīrti’s Two Types of *tattva*”.

Yoshimizu, Chizuko, “*anutpāda*: The Mādhyamika’s Challenge to the Theory of Causality”.

なお、第 5 回の国際中観研究ワークショップ（IWMS2019）は、2019 年 11 月 23 日と 24 日の

両日、“Madhyamaka and Yogācāra: A Dialogue between Two Main Streams of Mahāyāna Buddhist Philosophy”と題して、龍谷大学（大宮キャンパス）において開催予定です。

＊＊＊

第 64 回 ICES シンポジウム Ⅰ「『般若心経』を解体する ―般若心経研究の最前線―」報告

2019.5.18（東方学会主催、於日本教育会館）

斎藤 明（国際仏教学大学院大学・教授）

東アジアおよび内陸アジアの一部において『般若心経』は、『法華経』や浄土三部経とならんで大きな影響を与えてきた。同経典が広く受容された背景には、読誦や書写を重んじる大乗経典のなかでも、とりわけコンパクトに空思想を述べ、それを「掲帝掲帝（gate gate）…」の真言として集約し、多くの人々に受け入れられてきたことがある。また、「度一切苦厄」の句が端的に示すように、『観音経』と同様に、除災経典としての受容という側面も見のがせない。同経典をめぐっては、『二万五千頌般若経』との関係をめぐる分析的研究、チベット語訳の系統をめぐる研究、観自在を説主とすることの意味をめぐる考察、インド・チベットにおける諸注釈研究、さらにまた、同経は玄奘が大品般若経を基礎に漢文で創作した偽經であり、それが後にサンスクリットに反訳されたというような珍説も登場するなど、国際的にもむしろ関心は高まっている。

シンポジウム会場の様子

本シンポジウムは、以上のような近年の研究史をふまえたうえで、『般若心経』研究の最先端の状況を紹介・発表し、忌憚のない質疑応答と議論をもとに、『般若心経』の由来と内容を複数のアングルから再考することを目的として、斎藤明（国際仏教学大学院大学教授）がコンヴィーナーとなって企画された。

はじめに司会の斎藤が、以上のような趣旨説明と進行の段取りを説明した。その上でまず斎藤は、「『般若心経』の小本と大本 ―説主「観自在」の意味づけをめぐって―」と題する発表を行った。斎藤は、本格的な検討がなされてこなかった同経小本と大本の説主の問題に焦点をあてた。多くの般若経典がほぼ共通して説主である世尊（＝ブッダ）が解空第一のスブーティ（須菩提）を相手に問答形式で教理を説くのに対して、『般若心経』の説主はなにゆえアヴァローキテーシュヴァラ（観自在）菩薩であるのか、この菩薩はいったい何者なのか。斎藤は、この問題と関連して、兜率天上の菩薩（＝前生のブッダ）、成道後の梵天勧請、ならびに日夜それぞれに三度、三度行ったといわれるブッダによる「世間観察」（lokāvalokana）のもつ意味を考察した。

次に、渡辺章悟氏（東洋大学教授）は、「『般若心経』の系統 ―序文と空性表現を中心として―」と題して発表を行った。心経には小本と大本の二形態があり、渡辺氏がすでに考証したように、小本が先行して成立し、それが後に大本へと発展した。その祖型である小本は大品系般若にもとづいて成立したと推定される。氏は、心経の中心思想である空性表現に着目することにより、拡大般若が心経の成立に与えた外的な影響と心経の内部の展開の両面を分析した。氏の分析によれば、大品系般若から『十万頌般若』等といった拡大般若経の展開においても、『般若心経』に対応する空性表現を見る限り、大きな変化を被ることなく、般若経としての規格化・定型化が保たれていた。一方でまた、小本に序文が付加されることによって、大本は通常の経典の形式を備えるに至った。本発表では、とくに拡大般若経と『般若心経』の空性表現に焦点を当て、『般若心経』の序文が大本の再編成にどのように用いられたのかを考察した。

午後に入って、まず堀内俊郎氏（浙江大学 PD）が「『般若心経』に対するインド注釈文献の再検討 ―ヴィ

マラミトラの「八否定」解釈―」と題する発表を行った。インド撰述とされる八つの注釈書はいずれもチベット大蔵経に残され、梵本および漢訳には存在しない。またこれらは、玄奘訳によって親しまれている小本ではなく、「如是我聞」で始まる大本に対する注釈である。氏によれば、その中でもヴィマラミトラ（Vimalamitra、八世紀頃）による大部で精緻な注釈は、後代のインド・チベットにおける『心経』注釈書に大きな影響を与えたという。ただし、従来の研究ではその内容さが正確に読解されてきたとは言いがたい面もあり、氏は近年、同注釈の解析を試みてきた。本発表では、インド撰述の八つの注釈文献を概観したうえで、『心経』に説かれる「空性」・「無相」などの「八否定」に対するヴィマラミトラの解釈を詳論した。

続いて、石井公成氏（駒澤大学教授）は、「円測が見た『般若心経』の梵本」と題して、玄奘の弟子の円測が見たという『般若心経』の梵本とその問題を考察した。円測は、玄奘訳『般若心経』の注釈である『仏説般若波羅蜜多心経賛』において、「照見五蘊皆空」という部分を「照見五蘊等皆空」に作るテキストがあることを紹介し、梵本を見ると「等」の語があるという理由により、こちらの方が適切であるとした。慈恩大師・基の『般若波羅蜜多心経幽賛』のテキストも同様に「照見五蘊等皆空」となっているため、法相宗ではこのテキストを用い、現在でも法隆寺ではこの「等」入りのテキストが使われている。しかし、現存の梵文テキストには、「等」に相当する ādi などの語はない。また、『般若心経』については、梵文テキストには「度一切苦厄」に当たる部分がないことは良く知られているが、円測は梵文を見たとしていながら、この問題には触れない。氏は、これらの問題を手掛かりとして、『般若心経』の現存する梵文テキストと、円測をはじめとする唐代の注釈で用いられている諸本とを比較検討した。

最後に、Jonathan Silk 氏（ライデン大学教授）は、「広文脈下の『般若心経』―他の小経典類との比較を通して―」（英文）と題して、『般若心経』を他の複数の小経典、とくに陀羅尼経典類との比較を通して、同経がいかに受容され、いかなる意味内容と文脈の下で読まれ、書写され、学ばれてきたかを再考した。氏はとくに、『般若心経』の法隆寺写本において同経と連続して書写される『仏頂尊勝陀羅尼』*Uṣṇīṣavijayā dhāraṇī* との関連に着目した。『般若心経』もまた除災、臨終儀礼、追善等々の同様の目的から受容された点で共通し、それゆえ同経自体がまた一種の陀羅尼として受容されてきた事実を指摘した。ただし、同経はブッダ自らが説主とはならず、いかなる実践や取り扱い方にも言及がなく、また同経を受持することの恩恵を詳細に語ることもない点で他の陀羅尼経典類とは性格を異にするという。

五つの発表を終えた後に、およそ一時間、参会者からの質問をもとに、シンポジウムの全体テーマ、および個別の研究発表をめぐって、活発で有意義な討議を行った。六十名余りの参会者を得て、また質疑応答に比較的多くの時間を割いたこともあり、実り多いシンポジウムとなったように思う。

シンポジウム発表者（左から順に、
堀内氏、渡辺氏、斎藤氏、石井氏、Silk 氏）

＊＊＊

『『中観五蘊論』における法体系 ―五位七十五法対応語を除く主要術語の分析』出版を終えて

宮崎 泉（京都大学文学研究科・教授）

平成 31 年 2 月、京都大学の研究者を中心とする本研究班から『『中観五蘊論』における法体系 ―五位七十五法対応語を除く主要術語の分析』（以下『法体系』）が無事出版された。この度再びニューズレターの中で紹介さ

せて頂く機会を得たので、その内容を、以前の成果である『『中観五蘊論』における五位七十五法対応語 ―仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集』（以下、『五位七十五法対応語』）との関係を中心に記しておきたい。『法体系』の「はじめに」と重複することも多いが、今一度ここにも重要な点をまとめておこう。

本研究班では、これまで中観論書の中で例外的に定義的用例を多数含む『中観五蘊論』（*dBu ma phuṅ po lṅa pa*, **Madhyamaka-pañcaskandhaka*）を取り上げ、研究を進めてきた。『中観五蘊論』は、中観論師チャンドラキールティ（Candrakīrti, 月称）作と伝わる。サンスクリット原典は現存せず、11 世紀のチベット語訳のみが残る。『中観五蘊論』という呼称や著者問題、あるいは『牟尼意趣荘厳』『入阿毘達磨論』との関係は、前に『五位七十五法対応語』「はじめに」やニューズレターでも触れたので、ここには繰り返さない。そのいずれかを参照されたい。

さて、『五位七十五法対応語』ではいわゆる「五位七十五法」に対応する用語だけを扱ったが、「五蘊論」という書名の通り、『中観五蘊論』はそれらの用語を五蘊という枠組みの中で解説する。しかも『中観五蘊論』で解説される用語は七十五にとどまらず、その解説の順序も五位七十五法と異なっている。そのため『五位七十五法対応語』「はじめに」にも書いた通り、『中観五蘊論』で取り上げられる用語を扱う場合は、どのような列挙の中にその語が解説されるのかを知っておくことが、定義的用例そのものと並んで重要である。そこで今回『法体系』では「『中観五蘊論』の法体系における五位七十五法を除く重要語の位置」（p. xxxi–xxxvi）に一覧としてまとめた。その中に、どれを『五位七十五法対応語』で扱い、どれを『法体系』で扱ったかも示している。一覧から分かる通り、『中観五蘊論』では、五蘊、十二処、十八界の下に、五位に対応する「心相応行」（＝心所）「心不相応行」「無為」などの下位カテゴリーがあるほか、「心相応行」にはさらに「結」をはじめとする煩悩の類義語やその他様々な下位カテゴリーがある等、幾つか階層がある。『法体系』では、例えば、地、水、火、風だけでなく、それらを一括する大元素（大種）も取り上げるなど、できる限り多くの用語を取り上げることを目指した。一方で『法体系』でも取り上げられなかったものも少なくない。そこでまずここに用語の取捨選択の基準を解説し、『法体系』がどのような意味を持つ定義的用例集となっているのかを紹介しておきたい。

取捨の基準は明快である。すなわち「現代語訳の検討に資する定義が存在するかどうか」に尽きる。本シリーズの目的が定義的用例を収集し現代語訳を検討することであるから当然である。しかし『中観五蘊論』には現代語訳の検討に資する定義が存在しない用語もあり、その場合『法体系』ではそれを取り上げていない。では、ここで言う「現代語訳の検討に資する定義」とは何か。『中観五蘊論』の用語の定義は、概ね以下の四つの形式に分類できる。(1) その本質に基づく定義、(2) 下位要素の列挙、(3) 実体の数の提示、(4) 語源解釈や比喩的な解説、の四つである。『五位七十五法対応語』では基本的に (1) の形式だけを定義的用例として扱った。けれども、五位七十五法対応語以外では、(1) の形の定義を持たないことも多い。もちろん (2) や (3) だけでは現代語訳を検討するのは困難であるが、(4) の形式であれば、現代語訳を検討できる可能性がある。そこで、『法体系』では、(1) に加え、(1) の形の定義がなくても (4) の形の定義があるものも検討対象に加え、現代語訳を検討した。具体的には、86. kuśala-mūla（善根）、88. akuśala-mūla（不善根）、89. avyākṛta-mūla（無記根）、90. saṃyojana（結）、104. bandhana（縛）、105. anuśaya（随眠）、106. upakleśa（随煩悩）、107. paryavasthāna（纏）、108. āsrava（漏）、109. ogha（瀑流）、110. yoga（軛）、111. upādāna（取）、112. grantha / kāya-grantha（身繋）、113. nivaraṇa（蓋）の十四がそれに当たる。その結果、『法体系』では五十三の用語を検討することになった。上記の「現代語訳の検討に資する定義」を欠き、検討できないものもかなり残るが、それでも『五位七十五法対応語』で扱った七十五に五十三を加え、計百二十八の用語を取り上げたことになる。今回『法体系』で扱ったものには百法の中にも含まれないものがあり、一定数の新たな用語検討ができたと言えよう。今回も『五位七十五法対応語』と同様に、バウッダコーシャ・シリーズの既刊に対応がある場合は見出し語の下に既刊への参照を記しているが、既刊に対応がない時は関連研究があればそれを参考として示した。また、煩悩に関する用語は主に九十八随眠に十纏を加えたいわゆる百八煩悩との関係が説明される。これは直接現代語訳の検討に資するものではないが、ある

種の定義でもあるため、百八煩悩との関係が分かりやすくなるように表にまとめた。それも合わせてご覧頂きたい。

ところで、『五位七十五法対応語』出版以降ありがたいことに様々なご意見やご指摘を頂いた。その中に『中観五蘊論』のチベット語訳テキストと和訳の対応が分かりにくい箇所があるという指摘があった。そこで『法体系』では、さらに慎重に和訳の意図を説明するように心がけたが、これはある面では『中観五蘊論』のチベット語訳テキストの問題と関わっており重要である。そこで、繰り返しになるが、ここにももう一度簡単に取り上げて説明しておきたい。一般にチベット語訳は漢訳と比較し、サンスクリット原文を想定しやすい逐語訳的な傾向があると言われる。しかし『中観五蘊論』は翻訳あるいは伝承に問題があり、現存チベット語訳テキストは非常に難解で読みにくい。安易にサンスクリット原文を想定するのを躊躇するほどである。そのため『五位七十五法対応語』と『法体系』では、『牟尼意趣荘厳』や『入阿毘達磨論』、さらに『倶舎論』ならびにそのヤショーミトラ（称友）注等に平行句を求め、慎重にテキストを検討している。特に平行句がサンスクリットで残る場合は貴重であり、それに基づいて『中観五蘊論』のサンスクリットも想定しつつ、『中観五蘊論』のチベット語訳テキストを適宜訂正しながら和訳を作成した。このような事情から『五位七十五法対応語』でも煩雑になるのを怖れず注を付したつもりであったが、説明が不充分ないし説明に不備があった箇所もあったようである。『法体系』ではさらにその点に注意して作業を進めることを心がけた。もっともそれは『法体系』に全く不備がないという意味ではない。既に幾つか貴重なご指摘も頂いている。不備や誤りはなお残っていると思われるので、今後もご批判やご指摘を頂きながら改善を続けていきたい。引き続き、ご批正を乞う次第である。

やや専門的になるが、どれ程チベット語訳テキストに問題があるか示すために、ここにも『法体系』「はじめに」と同じ二つの具体例を紹介しておきたい。一つは、102. dṛṣṭi-parāmarśa（見取）に関わる一文である。その中に dman pa la dam par ʼdzin paʼi lta ba ni mchog tu ʼdzin paʼo // という一節がある。これを文字通りに読めば、parāmarśa（取, mchog tu ʼdzin pa）を説明しているように見えるが、実際には「見取」の説明という文脈であるため、『倶舎論』の平行句を考えても、例えば、dman pa la dam par ʼdzin pa ni lta baʼi mchog tu ʼdzin paʼo // といった方向に訂正して考える必要がある。似たようなサンスクリットの表現は幾つかあるが、例えば『倶舎論』には、hīne cāgragrāho dṛṣṭiparāmarśaḥ (AKBh ad V-16cd, Pradhan ed. p. 289) とある。そういったサンスクリットの平行句も踏まえ、この項目ではチベット語訳テキストの注の中に訂正を簡単に記している。もう一つの例は、元の翻訳から混乱していたのか、それとも伝承の中で混乱が生じたのか原因ははっきりしないが、サンスクリットでは別の二語が一文中に同じチベット語で訳されている例である。83. prāmodya（欣）の定義的用例を含む一文には、sems kyi rab tu dgaʼ ba ni sems kyi mgu ba ste / yid bde ba las tha dad du gyur pa ni rab tu dgaʼ baʼo // とあり、この中には rab tu dgaʼ ba という語が二度出る。逐語訳的なチベット語訳の性格を考えれば、どちらも同じサンスクリットを想定するのが自然であろう。しかし、この一文をそのまま引用する『牟尼意趣荘厳』のサンスクリットは次の通りである。cittapraharṣaś cittautsukyaṃ saumanasyāt pṛthagbhūtaṃ prāmodyam // これを見ると、前者が praharṣa に、後者が prāmodya に当たることが分かるであろう。もちろん prāmodya の定義であるから、praharṣa の意味が遠いわけはないが、そのままのチベット語訳テキストでは prāmodya の定義として非常に読みにくくなっている。このような例から、『中観五蘊論』のチベット語訳テキストの扱いには、他のチベット語訳テキストと異なる注意が必要になることが分かるであろう。このような事情も考慮しつつ、『法体系』所掲の『中観五蘊論』のテキスト・和訳をご覧頂ければ幸甚である。

最後になったが、今回の成果も多くの人のご助力があってどうにか出版することができた。しかしながら、今回も出版物には全ての人の名前を挙げられなかった。そこで、この場を借りて、関係して下さった全ての方にあらためて謝意を表したい。

記事

平成 30 年度第 2 回全体研究会

2019 年 3 月 9 日（土）14 時より、国際仏教学大学院大学 2 階 大講義室にて。

1. 研究代表者より、これまでの研究実績と成果刊行について説明がなされた。
2. 研究分担者より、各研究班における研究の現状と平成 30 年度の研究実績について説明がなされた。
3. 各研究協力者より研究発表がなされた。発表者と題目は以下の通り。
   - 生野 昌範
     「ヴィナヤ文献の定義的用例集」
   - 横山 剛
     「『中観五蘊論』における解脱について」
   - 苫米地 等流
     「アバヤーカラグプタの仏身論」
   - 室寺 義仁
     『瑜伽師地論』「摂異門分」における「生・老・死」解釈」
   - 斎藤 明
     『般若心経』と Avalokiteśvara ―小本冒頭部のテキスト、解釈、および由来を巡って―」
4. 上記の発表に関して、討論と総括がなされた。

令和元年度第 1 回全体研究会

2019 年 7 月 20 日（土）14 時より、国際仏教学大学院大学 2 階 大講義室にて。

1. 研究代表者より、これまでの実績と成果刊行について説明がなされた。
2. 研究分担者より、各研究班における現状と本年度の研究計画について説明がなされた。
3. 研究代表者より、研究組織の改変について説明がなされた。
4. 各研究協力者より研究発表がなされた。発表者と題目は以下の通り。
   - 生野 昌範
     「トカラ語文献のつたえる仏伝（その 2)」
   - 藤本 庸裕
     「説一切有部における有漏法と無漏法の定義の変遷過程」
   - 斎藤 明
     「tathāgata-garbha（如来蔵）の語意論考 ―『宝性論』を中心として―」
   - 堀内 俊郎
     「ヴィマラミトラの『般若心経注』にみられる仏教術語の解釈 ―般若波羅蜜、マントラ、照見、観察、無上正等覚―」
   - 菊谷 竜太
     「現観の修習におけるヨーガ行者の四階梯について」
5. 上記の発表に関して、討論と総括がなされた。

研究ノート

般若波羅蜜とマントラの語義

― ヴィマラミトラの『般若心経注』より ―

堀内 俊郎 （浙江大学ポストドクター*）

はじめに

『般若心経』（『心経』）に対しては、インド撰述とされる注釈書が 8 つ残されている。いずれも「如是我聞」で始まる大本に対する注釈であって、玄奘訳によってよく知られている小本に対する注釈ではない。英訳、中国語訳（8 つのうちの 4 つに対するもの）、和訳が存する[1]が、残念ながらどれも必ずしも納得のいくものではなく校訂テクストも存しないため、筆者は近年そのうちのヴィマラミトラ注（PHT）を手始めに、それらの注釈の校訂テクストの作成と和訳を開始した[2]。そのなか、特に PHT は『心経』の梵本の一字一句に対する極めて精緻な解釈を施しており、仏教術語の解釈という観点からも興味深い。筆者はこれまで PHT を冒頭から取り上げ、半分ほどの分量（D267b1–280b7 のうち、D273a7 まで）について、テクストと訳を提示した。本稿でとりあげる般若波羅蜜、マントラという仏教術語のうち前者についてはすでに取り上げたのだが、定義的用例に基づく仏教術語の現代語訳あるいは再検討という本バウッダコーシャ・プロジェクトに寄与すべく、その両語について考察したい。

1　般若波羅蜜[3]

まず、前稿で述べたように、PHT は nirukti 解釈を好む[4]ものであることと、これが翻訳チベット語文献である[5]という二つの点を確認しておきたい。そのうえで、以下の記述である。以下では先行訳も年代順に下に付しておく。

> [prajñā]
> PHT, D270a, P288b, T8: rnam pa sna tshogs shes pa'am/ shes pa'i mchog yin pas shes rab po//
> Lopez, 52: Because it is knowledge of the various aspects or is the supreme knowledge, it is called *wisdom*.
> 談等：以其遍知，且为无上智，故称「般若」(prajñā)。(73)
> 大八木：諸々の種類を知ること、あるいは知の最勝であることによって「般若」である。(89)

まずは一文目の「般若」という語の解釈について。先行訳は訳としては大きな問題はないが、梵本との対応を考えると、ここで PHT は「般若」の語義について慎重で精密な解釈を施していることが見えてくる。すなわち、PHT は本論でしばしば梵本に基づく nirukti 解釈を行っており、文体からいって、ここでも同様のことを行っていることが予想される。というよりもむしろ、そのように理解しないと、この箇所はなぜ般若といわれるのかということに対する有意味な説明にはならなくなってしまうのである。たとえば大八木訳を例にとれば、なぜ「諸々の種類を知ること、あるいは知の最勝

---

* 投稿時。中国博士后科学基金の研究成果の一部。

1 Lopez 1994、談等 2005、『集成』2016。

2 堀内 2018、Horiuchi 2018、堀内 2019ab。当初は『集成』に対する書評を書こうと思い、和訳のうちの問題があると思われる個所について、1. 原文、2.『集成』の和訳、3. 筆者による代案、という 3 つを提示していく形のものを構想していたのだが、その分量が多くなりすぎたため、訳し直すこととしたのである。それら拙稿のいささか無粋な体裁はこのような背景による。

3 本節は堀内 2019b で取り上げた個所に含まれる。

4 Horiuchi 2018 では ārya と bhikṣu という語についてそのことを示した。その他、本 PHT は、般若波羅蜜、マントラ（本稿 2 節）、菩薩（堀内 2019b）という語義の解釈に際し、nges pa'i tshig という語を用いる。

5 同論末尾のコロフォンを参照。先行訳はこれを翻訳チベット語文献と見ており妥当と思われるが、他方、渡辺章悟氏（『集成』38）、鈴木健太氏（『般若経大全』（東京：春秋社、2015, 169））はこれを最初からチベット語で書かれた文献と見ている。本テクストを実際に精読したうえでの評言か否か、疑問なしとしない。

であることによって」般若といわれるのか？と、さらなる疑問が生ずるのである。そこで、nirukti 解釈の線で他の文献を当ってみると、以下のような prajñā への解釈が、*Abhidharmasamuccayabhāṣya*（ASBh）にみられる。

> ASBh, 105.24–106.1: parapraṇītajñānāt [106] pratyātmajñānāt prakārajñānāt śamaprāptiguṇa-prakarṣajñānāc ca prajñā | (*Abhidharmasamuccaya-Bhāṣyam*. N. Tatia ed., Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1976.)

その中の prakārajñānāt と (guṇa)prakarṣajñānāt というのが、順にこの PHT のチベット語に関連する可能性が高いのである。なお、直後の注釈で、ASBh は、最後の項目を śamaprāptaye jñānaṃ と guṇaprakarṣāya jñānaṃ（美徳の卓越さへの智）と分けている（106.3–4）。また、別文献では、

> *Sāratamā*, 71: yo ’nupalambhaḥ sā prajñā-pāramitā, prakṛṣṭajñānatvāt pāragatvāc ca/（P. S. Jaini: *Sāratamā. A Pañjikā on the Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā Sūtra by Ratnākaraśānti*. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1979. (Tibetan Sanskrit Works Series, 18)）
> D tha 99a2–3: gang mi dmigs pa de ni shes rab kyi pha rol tu phyin pa ste phul du byung ba’i shes pa nyid kyi phyir dang/ pha rol tu phyin pa nyid kyi phyir ro//

とある。これに基づけば、「卓越さへの知」ではなく、「卓越した（prakṛṣṭa）知」となろう。

いずれにせよ、文体からいって、上記の PHT も prajñā という語に対して nirukti 解釈を行っているとみられる[6]。とすれば、PHT 上掲の rnam pa には ākāra も想定しうるが、prakāra も同様に想定可能であり、nirukti 解釈の観点からは後者の可能性が高い。ところで、『心経』ではのちに〔自性〕「空性（śūnyatā）」、「無相（alakṣaṇā）」、「不生」などという八句[7]が言及されるが、それらは PHT では rnam pa として言及されている[8]。とすれば、この般若の語義解釈は、のちに展開される PHT の『心経』解釈とも関連すると推測しうる。すなわち、般若（prajñā）とは、様相（prakāra）の智（jñāna）、様相を知る智、ということであり、その *prakāra, rnam pa とは、「空性」「無相」などという八つを指すのである。かくして原文、想定梵本と訳は以下の通り。

> rnam pa sna tshogs shes pa’am/ shes pa’i mchog yin pas shes rab po//
> vividhaprakārajñānāt/-tvāt prakarṣa/prakṛṣṭa-jñānād/-tvād vā prajñā |
> 様々な（*vividha）様相の智（*prakārajñāna）である、あるいは、卓越さへの智/卓越した智（*prakarṣa/prakṛṣṭa-jñāna）であるので、「般若」（智慧、*prajñā）である。

PHT による後付けの解釈といえばそれまでであるが、これは、空性などを知る知がなぜ〔jñāna でも vidyā でもなく〕prajñā といわれるのか、換言すれば、prajñā と空性などを知る智がいかに関連付けられるのか、ということへの回答を提供している。それは、prajñā は、自性空性などという様相（prakāra）を知る知（jñāna）

---

6 類似する説明が SPT にもみられる（D18b3ff., P23a3ff.: rnam pa thams cad shes pa’am/ shes pa’i mchog ni shes rab bo// ...）。
なお、Harunaga Isaacson 先生より、*Yogaratnamālā* の例をご教示いただいた。また、菊谷竜太氏より資料を提供いただいた。記して謝意を表す。
Yogaratnamālā, 108.10–11: prakṛṣṭaṃ jñānaṃ prajñā (D No. 1183, kha, 6b: khyad par can gyi ye shes ni shes rab ste/)
その線で prajñā という語への解釈を調べてみると、phul du byung ba’i ye shes（Karuṇaśrīpāda, *Pradīpodyotanodyota-nāma-pañjikā*; Ratnākaraśānti, *Śrīhevajrapañjikā-muktikāvali-nāma*; Ḍhaṃkadāśa, *Śrīhevajratantrarājaṭīkā-suviśadasaṃputa-nāma*）や、khyad par du ’gyur ba’i ye shes（Abhayākaragupta, *Pañcakramamataṭīkācandraprabhā-nāma*）や、mchog tu byung ba’i ye shes（Vṛddhakāyastha, *Suviśadasaṃpuṭatīkā-nāma*）も、prakṛṣṭaṃ jñānam を支持・指示するようである。

7 便宜的に法成訳（T No. 255）によって示すと、(1) 空性。(2) 無相。(3) 無生。(4) 無滅。(5) 無垢。(6) 離垢。(7) 無減。(8) 無増。主語は一切法。インド・チベットの注釈者はこれを 8 句と見る。他方、諸漢訳は冒頭句を「空相（śūnyatālakṣaṇā）」と読むので否定句は 6 つとなり、「六不」などと言い慣わされる。

8 堀内 2019b: 174。

だからである。逆にいえば、prajñā は prajñā であるからこそ、空性などという様相（prakāra）を知ることができるのである。

そして、prakarṣa/prakṛṣṭa という語でもって prajñā を解釈する二番目の解釈もこれに密接に関連する。すなわち、PHT は直後には般若波羅蜜という語を解釈して、以下のように言う。

> [prajñāpāramitā]
> dam pa'i dngos po ni dam pa nyid de dam pa kho na yin no// 'jig rten na gang las (na gang las] PT; gang la D) mchog gzhan med pa de (pa de] T; pa DP) ni dam par (par] PT; pa D) bshad de/ shes rab kyi dam pa nyid ni (ni] PT; na D) shes rab kyi pha rol tu phyin pa yin no//
> de bas (de bas] D; des PT) na 'di skad du/ rang gi ngo bo stong pa la sogs pa'i rnam pas shes pa dam par 'gyur te/ shin tu mchog dang ldan pa gang yin pa de ni shes rab kyi pha rol tu phyin pa nyid do//
> 最勝の（*paramasya）抽象名詞形（*bhāva）が「最勝性（*pāramī）」であって、最勝（*parama）に他ならないのである。世間においてそれよりも別な優れたものが存在しないもの、それ[9]が、最勝（*parama）と説明される。すなわち、般若（智慧、*prajñā）の最勝（*parama）性が、「般若波羅蜜（prajñā-pāramitā）」である。
> それゆえ、「（1）自性が空である」などという様相（*prakāra）によって〔prajñā は〕最勝（*parama）な智（*jñāna）となる、すなわち、極度の卓越性（*atiprakarṣa）を具えた〔prajñā〕、それが、般若波羅蜜（prajñā-pāramitā）である。

「（1）自性が空である」という語は直接的には『心経』の経文の (pañca skandhās tāṃś ca) svabhāvaśūnyān を指すと思われよう。しかし、PHT は、上記の八句を解釈するなかの「（1）空性」の説明の箇所において、この句には「自性」という語が結び付けられるのだと述べている[10]。すなわち、（1）句は「〔自性〕空性」と読まれるべきだという指示である。ゆえに、これは八句の冒頭句を指すと理解しうる。「など」とあることと、本 PHT の後の箇所での記述[11]も、この解釈を支持する。さて、2 段落目に明らかなように、prajñā が自性空〔性〕などという様相（prakāra）を知ることによって最勝な智となる、すなわち、極度の卓越性（ati-prakarṣa）を具えることになる、それゆえ、prajñā は prajñāpāramitā となるのである。まとめると以下の通りとなろう。

> prajñā = prakārajñāna/prakarṣa(/prakṛṣṭa)-jñāna > prakāra を知る > prajñā は atiprakarṣa を具える = prajñāpāramitā

一言でいえば、PHT の解釈によれば、般若の智慧とは、空性などを悟る卓越した智慧のことをいう。

ついでにもう一か所、筆者がこれまで取り上げていない PHT 後半部の箇所を紹介しておく。それは、『心経』の、「三世にいる一切の仏は般若波羅蜜に依拠して無上正等覚を現等覚した」という経文における「般若波羅蜜に（prajñāpāramitām）」という語に対する解釈である。

> PHT, D278a, P299a, T26: shes rab kyi pha rol tu phyin pa la (pa la] DT; pas P) zhes 'byung ba ni de bzhin gshegs pa'i ye shes kun 'byung ba (ba] DP; ba'i T) bden pa'i bdag nyid la yin te/
> Lopez, 66: Regarding *the perfection of wisdom*, the wisdom of the Tathāgata is the nature that is true of everything that arises

---

9 gang ... de の対応であるので、T 版を採用する。

10 D274b、P294b、T19。（2019 年 5 月 18 日の ICES64 での発表資料を参照）

11 PHT, D271a, P290a–b, T10（堀内 2019b: 174）: **yi ge kha cig** las 'di ltar zhes 'byung ba de'i tshe ni 'di ltar zhes bya ba 'dis (1) rang gi dngos po (= DPT; *read* ngo bo) stong pa dang/ (2) mtshan nyid med pa dang/ (3) ma skyes pa la sogs pa 'og nas 'byung ba'i rnam pa rnams kyis (kyis] PT; kyi D) lta ba khyad [P290b] par can du bzhed do// de nyid kyi phyir sna tshogs kyi don brjod pa (pa] DP; par T) rnam par gyi sgrar sbyar (sbyar] PT; sbyor D) ro//（あるテクスト（異本）に「evam（以下のように）」と出ているその時には、evam というこれによって、「（1）自性を欠いている（自性空）[*1]」、「（2）無相」、「（3）不生」、など、後に出る諸の様相（rnam pa, *prakāra）によって、「〔照〕見する」ことを修飾する意図があるのである。まさにそれゆえ、“種々な（*vividha）”という意味を述べるものである vi-という語を〔avalok に〕結合したのである。）[*1]: 八句の冒頭句を指す。stong pa で śūnyatā の訳として可能であるので「（1）自性空性」としてもよかろう。

談等：般若波罗蜜多为如来证智，为如实生起一切法之自性（77）
大八木：「**般若波羅蜜によって**」というのは、如来の智慧がすべての生じたものの真実の自体にあって、（105）

先行訳はこれに気づいていないために誤読しているが、de bzhin gshegs pa'i ye shes kun 'byung ba bden pa は、『十地経』（第五地）に説かれる、いわゆる「十諦」の一つであるところの「起如来智諦」を指す。

Daśabhūmikasūtra, (Rahder ed.) 42.C, (Kondo ed.) 82.4: tathāgatajñānasamudayasatyakuśalaś

そして、ヴィマラミトラは自身の別の著作である SPT（『七百頌般若』に対する注釈）でもこれに言及している。

SPT, D27a1: de la de bzhin gshegs pa'i ni de bzhin gshegs pa'i ye shes kun 'byung ba'i bden pas thob par bya ba yin pas 'dir ma bshad do//
和訳：そのなか、如来〔地〕は、起如来智諦によって得られるべきものであるので、ここでは説かれていない。

PHT 上記の先行訳に対するその他のコメントとしては、最後部の la yin te の la は、shes rab kyi pha rol tu phyin pa la の la と同格の Acc. であって、Loc. ではない。 bdag nyid は Bv. であって、般若波羅蜜にかかる。かくして筆者の訳は以下の通り。

「般若波羅蜜に」と出るのは、"如来智の原因である諦"（起如来智諦、tathāgatajñānasamudayasatya）を本質とする〔般若波羅蜜〕に、である。
代案：[*Having relied*] *on the perfection of wisdom* means [having relied] on [the perfection of wisdom] that has the nature of the truth, *i.e.* the cause of the gnosis of tathāgatas.

なお、PHT は以下のように続く。rnam pa thams cad mkhyen pa nyid ces brjod pa gang yin pa la bya'o// shes rab kyi pha rol tu phyin pa la brten nas zhes 'byung ba ni 'di yang dag par rdzogs pa'i byang chub las dus snga ma'i phyir ro// rnam pa thams [T27] cad mkhyen pa nyid 'di ni bar chad med pa'i ting nge 'dzin yin par blta bar bya ste/（すなわち、"一切種智性"（*sarvākārajñatā）と言われるものを指す。「般若波羅蜜に依拠して」と出るのは、これは、正等覚よりも前の時であるからである。この一切種智性は、無間三昧（ānantaryasamādhi）であると見られるべきである。）

ヴィマラミトラは経文のこの箇所での「般若波羅蜜」を、起如来智諦、一切種智性、無間三昧を指すものと理解しているのである。本箇所についての先行訳の吟味は別途行う。

2 マントラ

『心経』が経典か、マントラ文献かという議論がある。他方、インド・チベットの注釈者としては、現にある『心経』（この場合は先述したように大本であるが）が経典部分とマントラ部分の両方を含むものである以上、その意義に対する後付けの説明をすることとなる。現に、PHT は、『心経』のマントラの部分を注釈するに際し、

PHT, D278b, P299b, T28: shes rab kyi pha rol tu phyin pa nyid gsang sngags so zhes bstan pa'i phyir/ [P300a] shā (DP; sha T) ri'i bu de lta bas na zhes bya ba la sogs pa gsungs so//
般若波羅蜜こそがマントラ（mantra）であると説くために、「舎利弗よ、それゆえ」云々と説かれた。

と述べている。要するに、経本体とマントラ部分には同じことが説かれているのだというのである[12]。ここでは、上記から一文はさんだ後に展開される mantra という語に対する語義解釈を検討しておきたい。

[mantra 解釈 1]
gsang sngags ni (a) shes pa yin pa'i phyir dang/ (b) skyob pa yin pa'i (pa yin pa'i] DP; pa'i T) phyir ro// (ro//] DP; te/ T)
Lopez, 67: A secret mantra [is so-called] because of being a mind [*manas*] and because of being a protector [*traya*].
談等：「秘密咒」者，以其为意故、以其为怙持故。(97)
大八木：「真言」〔というの〕は知るものであるためと、守護するものであるためである。(106)

[12] アティシャは、順に、鈍根・利根の者に対してだと指摘する。後述でその説明の一部を取り上げる。

Lopez 氏の *traya* は threefold, triple を意味するので単なる誤植であろうが、nirukti 解釈を訳す際には梵本を示すことが不可欠であるので、その姿勢は大いに評価できる。他方、談等は、前者について、マナ識を指すという解釈を施す[13]。

さて、PHT 本箇所の対応梵本は、PW (Petersburger Wörterbuch), s.v., manana にある用例（mananāt trāṇanān mantraḥ (trāṇana!)）に基づいて想定しうる。すなわち、PHT は、mantra という語を、manana（考える）と、trāṇana (√trai（守護する）) と、nirukti 解釈しているのである[14]。なお、Apte の梵英辞典（*The Practical Sanskrit-English Dictionary*）によれば mananam には 1. thinking; 2. intelligence; 3. an inference arrived at by reasoning; 4. a guess などの意味がある。

その他、Almogi 2009: 87.fn.153 は Kāṇha's *Yogaratnamālā* (p. 109.15): mantra eva tattvaṃ | mananā‹t› trāṇanāc ca mantraḥ | を挙げる。ITLR の mantra のエントリー（`http://www.itlr.net/hwid:35205`）も参照。その他、*Śabdakalpadruma*, s.v., mantra: mantraśabdasya vyutpattir yathā — mananāt trāyate yasmāt tasmān mantraḥ prakīrtitaḥ.

以上に基づく筆者の訳は以下の通り。

「マントラ（mantra）」とは、(a) 知（*manana）であるから、そして、(b) 守護〔するもの〕(*trāṇana) であるから。

Mantra is [so called] inasmuch as it is intelligence (*manana*) and it is protection/ the means of protection (*trāṇana*).

ところで、PHT は別の解釈も提示する。

[mantra 解釈 2]

a. PHT, D279b, P300b, T30: de ltar gsang sngags kyi nges pa'i (pa'i] DT; par P) tshig gi don bstan nas gsang ste brjod par bya ba nyid kyi nges pa'i tshig gi don bstan pa'i phyir/ (bden te ma log pa'i phyir zhes bya ba la sogs pa gsungs so//)

Lopez, 68: Having set forth the meaning of the etymology of secret mantra, the meaning of the etymology of that which is expressed secretly is set forth. Therefore, ...

談等：于名言上说“秘密咒”，其名言义即为秘密显示。故是…（80）

大八木：以上のように真言の語源的意味を示し、〔次に〕密かに説かれるべき語源的意味を示すために、…（108）

mantra に対するこの解釈は、PHT の少し後の箇所でも再び言及されている。

b. PHT, D279b, P301a, T30: gsang sngags ni gsang ste bshad par bya ba yin no zhes bya ba'i nges pa'i tshig 'di ni 'dir ('di ni 'dir] T; ni 'di DP) skad kyi dbyings la ltos (ltos] D; bltos PT) par bya ba yin no//

Lopez, 68: The etymology of secret mantra is “that which is explained secretly.”This is the context of this statement.

談等：由此引伸而言（81）

大八木：「真言は密かに解説されるべきものである」という〔時の〕語源的説明は、言葉の語源を見るべきである。（108）

Lopez, 談等（sic. である。何等かの混乱があるのであろう）は誤り。大八木訳は「言葉の語源」は誤り（skad kyi dbyings は梵本として dhātu が想定され、語根を意味する）であるが前二訳に比べれば前進はしている。なお、PHT 当該箇所では波線部が gsang ste bshad par bya ba とあるが a の破線部と同じものを指すと思われ、同じ PHT 内部で表記に揺れがある。

さて、PHT のこの mantra 解釈はヴィマラミトラによる恣意的なものではなく典拠を有している。まず、mantra の語義に関して調べてみると、『二巻本』no. 295 にエントリーがある。そのなか、例によって当該書は適宜梵本を引いてチベット語訳を提示している。そこで言及される梵本は、『二巻本』和訳では matreguptibhāṣaṇe（石川 108）だが、校訂テクストには mantreguptibhāṣaṇe とある（Ishikawa, 97、ともに sic.）。ただ、この『二巻本』の提示するテクスト自体に問題があるようである。すなわち、Almogi 2009: 85.fn.141 によれば、The text reads *mantre guptibhāṣaṇe*; emended according

[13] 談等 79：指末那识。于《解深密经》中，末那识为称意。

[14] Negi にはその他 trāṇam, tāyī などが対応語として提示されている。

to *Dhātupāṭha* 10.140: *matri guptabhāṣaṇe*, “the root *matr* (= *mantr*) [is employed] in [the sense of] ‘secret speech’.”なお、ITLR 上記も参照。

以下ではヴィマラミトラ自身が指示する Dhātupāṭha の用例に基づいて読んでおいたが、チベット語訳からはカッコ内も可能であろう（gupti-で読んで Instr.（guptyā）で理解したか）。

a. 以上のようにマントラの語義解釈（訓釈、nirukti）の意味を説き示してから、“秘匿された説示（guptabhāṣaṇa。Tib: 秘匿して述べられるべきものであること）”という語義解釈の意味を説くために、「真実である。虚妄ではないから」云々と説かれた。

b.「マントラ」とは秘匿された説示（秘匿して説かれるべきもの）である、というこの語義解釈（nirukti）は、ここでは[15]、語根（dhātu）（ Dhātupāṭha）に依拠すべきものである。

以上は実質的には mantra 関係の研究からは目新しいものではなかろうし、最後の点はすでに Almogi 2009 によって明らかにされたことであるが、『心経』注釈文献に関する先行訳は、上記の通りそれに無自覚である。ヴィマラミトラによる以上の解釈とその前後を、経文との対比でまとめれば以下の通り（詳細は同箇所の翻訳を公表する際に提示する）。

prajñāpāramitā = mantra

tasmāj jñātavyaḥ prajñāpāramitā mahāmantro（自在天などのマントラと仏教のマントラを区別する）

マントラの意味（I）：a. manana, b. trāṇana（知と守護）

a. manana 知

mahāvidyāmantro ’nuttaramantro ’samasamamantraḥ

b. trāṇana 守護

sarvaduḥkhapraśamanamantraḥ

マントラの意味（II）：guptabhāṣaṇa（秘匿された説示）

satyam amithyatvāt ...

最後に、PHT に対する複注的性格を有する『心経』アティシャ注（D No. 3823, P No. 5222）の本箇所に対する説明を見てみよう。

D317a, P338a: da ni dbang po rnon po’i dbang du byas nas shes rab kyi pha rol tu phyin pa’i don mdor bsdus nas gsang sngags kyi don du bshad pa ni/ shā ri’i bu de lta bas na zhes bya ba la sogs pa ste/

今や、利根の者に関して、般若波羅蜜の意味を要略してマントラの意味として説いたのが、「shā ri’i bu de lta bas na」云々である。

上記の箇所は問題ない。問題はその直後である。

lam lnga po de nyid (nyid] P; dag D) shes pa’i don dang skyob pa’i don dang/ de gnyis kyi phan yon dang/ sngags nyid kyi (kyi] D; φ P) bshad pa ste (ste] P; dang D)/ de ni lan bcu gcig pa yin no//

Lopez, 77: the meaning of the knowledge of the five paths, the meaning of protection, the benefit of these two, and the explanation of the mantra itself are one answer.

談等：即为五道义及怙持义。说此二者之利益及诠释密咒，是为一答。(93)

望月海慧：それらの五道を知る意味と守護の意味とその二つの利益と仏性が解説されており、以上が十一の回答である（223）

構文がむつかしいのは確かであるが、この前半部は、上記の検討で明らかなように、マントラには知の意味と守護の意味があるとされていることを指したものである。その点でまず先行訳は誤り。Lopez 氏と談等は bcu gcig pa, eleventh を「one」や「一」と訳しているが、これは、PHT が『心経』では質問に対して 11 の回答がなされていると解釈している[16]ことをうけ、『心経』のマントラ部分を 11 番目の回答と解釈したものである。他方、望月氏の訳の「仏性」は sngags nyid を sangs rgyas nyid と勘違いしたのであろう。筆者の訳は以下の通り。

[15] DP だと nges pa’i tshig ni ’di（語義解釈は、これは、）で文としてしっくりこないので、T を採用した。

[16] 堀内 2019a。

[17] 資糧、加行、見、修、無学道。

その同じ五道[17]は、〔マントラの〕知の意味と、守護の意味と、その両者の利益と、マントラ自体の解説であって、それが 11 番目の回答である。

あるいは後半部分は sngags nyid kyi (kyi] D; φ P) bshad pa の kyi を kyis に訂正し、「〜とマントラ自体によって〔五道が〕解説されている」と読むべきか。いずれにせよ、『心経』のマントラの部分も経前半部と同じく五道を説いているという解釈であり、本節での考察を踏まえれば文意明瞭。

さて、PHT の以上の解釈を踏まえた現代語訳であるが、mantra はマントラとしておくよりなかろう。本稿 1 節の prajñā も、般若、智慧あたりしかあるまい。このような nirukti 解釈が背景にある場合、その含意をすべて伝える現代語訳は不可能である。

3 おわりに

本稿では先行訳によって明らかにされてこなかったヴィマラミトラによる梵本に基づく仏教術語の解釈を明らかにした。一般論として、翻訳という営みが一つの言語から別の言語への単なる単語の置き換え作業ではないとするならば、それを行う際には余程の慎重さが求められるのではないか。その際、視野や見識の拡大、他分野の専門家との情報交換なども必要とされよう。その点で、多くの分野の専門家の関与するこのバウッダコーシャ・プロジェクトは、次世代型の仏典翻訳のモデルケースを示しているのではなかろうか。

略号、および参考文献（紙幅の都合で大方の略号は堀内 2019a を参照）

ITLR — Indo-Tibetan Lexical Resource (`http://www.itlr.net/`)

PHT — Vimalamitra (tr. Vimalamitra, Nam mkha', Ye shes snying po), '*phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i snying po'i rgya cher bshad pa* (Āryaprajñāpāramitāhṛdayaṭīkā), D No. 3818, P No. 5217, T (TBRC Core Text Collection 7, TBRC Resource ID: W23159 (`https://www.tbrc.org/#!rid=W23159`), Bir, Himachal Pradesh: D. Tsondu Senghe, 1979., 33p.; 8x44cm), P No. 5217.

大八木 — 大八木隆祥「ヴィマラミトラ 般若心経広大註」『集成』69–122.

『集成』 — 『般若心経註釈集成＜インド・チベット編＞』渡辺章悟・高橋尚夫編、東京：起心書房、2016。

談等 — 谈锡永等著譯『心经内义与究竟义』2010, 华夏出版社（pp. 52–84:「圣般若波罗蜜多心经广释」无垢友尊者造 谈锡永 刘卓衡译）

『二巻本』 — 石川美恵（Ishikawa Mie）『Sgra sbyor bam po gnyis pa 二巻本訳語釈 —和訳と注解—』東京：東洋文庫、1993。*A Critical Edition of the Sgra sbyor bam po gnyis pa: An Old and Basic Commentary on the Mahāvyutpatti*. Tokyo: The Toyo Bunko, 1990.

Almogi, Orna
— 2009 — *Rong-zom-pa's Discourses on Buddhology: A Study of Various Conceptions of Buddhahood in Indian Sources with Special Reference to the Controversy Surrounding the Existence of Gnosis (jñāna: ye shes) as Presented by the Eleventh-Century Tibetan Scholar Rong-zom Chos-kyi-bzang-po*. Studia Philologica Buddhica Monograph Series 24. Tokyo: International Institute for Buddhist Studies.

堀内 俊郎（Horiuchi Toshio）
— 2018 — "Dialog between Madhyamaka, Vaibhāṣika, Sautrāntika, and Yogācāra: From Vimalamitra's commentary on the *Heart Sutra*", *The 2nd International Conference of the Chinese Association of Vijñaptimātratā Studies*（东方唯识学会第二届国际研讨会論集）, 271–290.

— 2018 「インドにおける『般若心経』注釈文献の研究 —ヴィマラミトラ注（3）—」*Acta Tibetica et Buddhica* 11、99–121。

— 2019a 「インドにおける『般若心経』注釈文献の研究 —ヴィマラミトラ注（1）—」『東洋学研究』56、165–195。

— 2019b 「インドにおける『般若心経』注釈文献の研究 —ヴィマラミトラ注（2）—」『国際哲学研究』8、167–187。

Bauddhakośa Newsletter no. 8（2019 年 12 月 15 日発行）

発行元：
Bauddhakośa プロジェクト
（A Comprehensive Research on Bauddhakośa Project: Constructing a New Model for the Coming Generation【Grant-in-Aid for Scientific Research (A)】）

〒 112-0003
東京都文京区春日 2-8-9
国際仏教学大学院大学
斉藤科研費研究室
Email: office.bauddhakosha@gmail.com

印刷　株式会社サンワ

Bauddhakośa プロジェクトの研究成果は、以下の URL よりご覧いただけます。
`http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/start_index.html`